

令和2年度 千葉大学教育学部美術科・図画工作科 卒業・修了制作展

ご挨拶

私たち千葉大学教育学部美術科・図画工作科は、4年間もしくは6年間で美術教育を学んだ結果として、例年は卒業・修了制作展を千葉県立美術館で開催していました。しかし今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、例年通りの形式での開催が難しくなっていました。展示を楽しみにしてくださっていた方々には誠に申し訳ございませんが、今年度はウェブ上での開催となりました。

今年は実際に作品を見てくださった方々からご批評をいただくことはできませんが、積極的なWebの活用により、これまで鑑賞していただけた方々に加え、より多くの方にも作品を見ていただける機会と考えております。今まで展覧会を見に来てくださった方も、まだ見たことがない方も、これまで同様、様々なご意見ご感想をいただけましたら幸いです。

千葉大学教育学部美術科・図画工作科学生一同

未曾有の感染症災禍の中、このたびは、千葉大学教育学部美術科・図画工作科の卒業制作展サイトをご覧いただき、誠にありがとうございます。

千葉大学教育学部美術科・図画工作科では、児童生徒の創作活動を支援することができる力を身につけるために、教育理論だけではなく、学生自身が制作経験を重ねることも教育の柱の一つと考えております。Web掲載の作品は、卒業・修了研究において、制作を希望した学生によるものでございます。

美術大学のように十分な経験を積ませることはできませんでしたが、学生各々が4年間あるいは大学院までの6年間の学修のまとめとして、自ら表現の意味を熟考し、構想を練り、さまざまな素材に真剣に向き合った成果です。

作品現物をご覧いただけないことは、誠に残念ではありますが、作品画像の中に、それぞれのひたむきな試行錯誤の痕跡をご覧いただけるのではないかと考えております。

卒業・修了生は、今後も更なる研鑽を積んでいくことと思います。どうぞじっくりとご高覧ください。

千葉大学教育学部造形教育講座主任 後藤雅宣

出品者一覧

小学校教員養成課程 図画工作科選修

- ・片岡勇翔（彫刻研究室）
- ・小林瑞月（彫刻研究室）

中学校教員養成課程 美術科教育分野

- ・瀬谷香琳（彫刻研究室）
- ・藤野真絢（絵画研究室）
- ・山本愛里沙（絵画研究室）

大学院 教育学研究科 学校教育学専攻 芸術・体育

- ・許芳薇（構成研究室）

片岡勇翔



タイトル：「存在」

作 者：片岡勇翔

サ イ ズ：2020×600×600 mm

素 材：ジェスモナイト（水溶性樹脂）

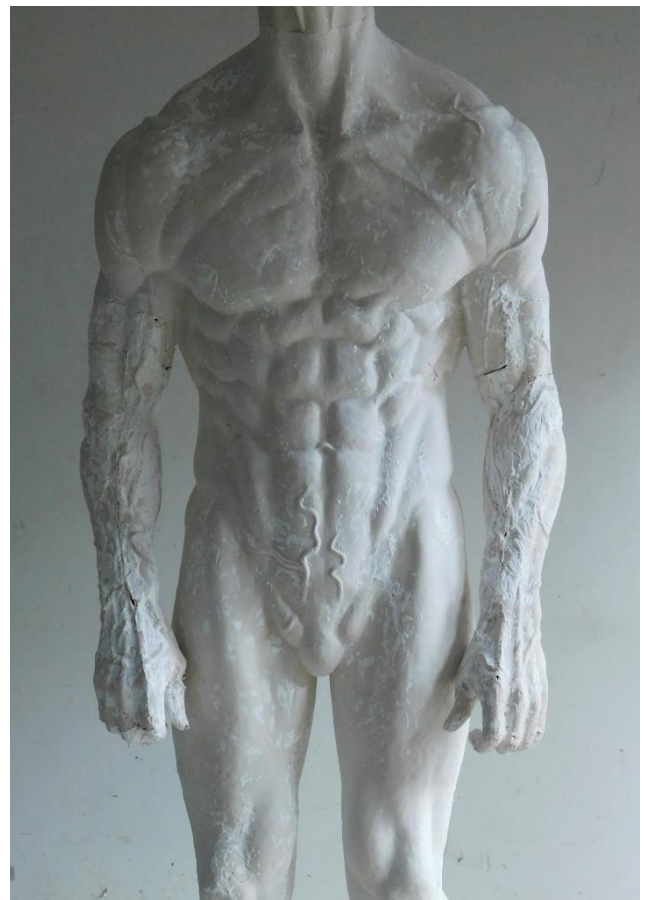
作品解説

人類史の中で、人間の身体を持つ神像はもちろん、様々な神話や経典を具現化した獣の頭部や身体を持つ神像が存在し、今日もまだ深い信仰の対象となっているものも存在する。本制作ではそのような古典的な表現を自分なりの表現へと取り入れ、神のイメージを私なりに解釈し、畏怖を感じられるような立体作品として表現したいと考えた。

本制作では、粘土で造形したものを一度石膏で型を取り、ジェスモナイトという水溶性の樹脂に置き換えて制作を行った。神々しさや恐ろしさ、そして生命力を表現するために肉体の表現や写実性を追求した。特に肉体と顔の表現には力を入れて造形を行い、目玉は鎌倉時代の仏像などに見られる、玉眼という技法から着想を得て、顔の裏側から別の素材で制作した根球を埋め込むことでより生命力のある表現にすることができた。

研究目的

本制作では、これまでの制作では使ったことのない新しい素材であるジェスモナイトという水溶性樹脂を用いて制作を行った。これまでの美術教育においては、粘土で成型したものを別の素材に置き換えて制作を行うことは少ないように感じる。本素材は従来から一般的に日本国内で広く使われている樹脂とは異なり、シンナー等の人体に有害な有機溶剤を使わずに造形制作が可能である。学校教育の現場でも、注意事項をしっかりと伝え、扱い方に十分に注意を払うことで活用することができるのではないかと考えている。



小林瑞月



タイトル：「誰かの夢に」

作 者：小林瑞月

サ イ ズ：H2980×W1140×D1830mm

素 材：木材、鉄線、障子紙、布

作品解説：

本作品には、青森のねぶたのような表現方法を用いている。芯棒の角材に、針金の太さと同じ太さのドリル刃で3～4cmの深さの穴を開け、そこに針金を挿す。針金を曲げて作りたい形の頂点を取り、もう一方の端をドリル穴に挿して固定する。それを繰り返して行ってフープ状にたくさん針金が挿さったら、今度はその針金同士を別の針金でつなげて、より作りたい形に近付けていくとともに、強度も上げていく。針金同士を接続する時には、電線を圧着するためのスリーブや、麻紐に木工用接着剤をつけて針金に巻きつける方法を併用した。針金の骨組みが完成したら、紙貼りの工程に移る。障子紙を貼るときは、貼りたい場所の針金に木工用接着剤を塗り、紙を貼り付ける。接着剤が乾いたら、針金からはみ出た部分の紙をカッターで取り除く。明かりには、LED 投光器を2つ使用した。

研究目的：

私は以前から、図工美術の授業で児童生徒が一般的に好印象を与える、そして教員の好みに当てはまる作品を作ろうとする傾向があるのではないかと感じていた。自分が教員になる前に、一度そのような傾向から離れ、より広い視野で造形表現を見渡し、作品作りに挑戦しようと考えた。制作のテーマは、『鑑賞者が居心地の悪さや不安などを感じる作品と空間づくり』である。鑑賞者が居心地の悪さや不安、悲しさなどの負の感情を感じる作品を作りたいと考えた。モチーフには、私がお日見た夢を文章や絵で記録している夢日記の中から、特に恐怖を感じた悪夢に出てきた化け物を設定した。大きな化け物だが、あまり質量を感じさせない、ゆらゆらとした様子を表現するために参考にしようと考えた表現方法は、青森のねぶただった。立体で表現することで、私が目覚めた時に感じた違和感に近いものを鑑賞者にも感じてほしいと思っている。



瀬谷香琳



「暗い水」



「明るい空」

タイトル：「暗い水」、「明るい空」

作 者：瀬谷香琳

サ イ ズ：800×1000×600（mm）、700×800×1200（mm）

素 材：石膏、石粉粘土、針金、毛糸

作品解説：

ふたつの作品それぞれの髪は水と雲をイメージしています。精神的な浮き沈みによる辛苦とその悩みから解放されたいという思いを水と空のイメージに重ねて制作しました。自己と向き合い、言葉にするのが難しいことを外にだすというのも表現の役割だと制作を通して感じています。

研究目的：

仏像の光背に関心をもったことから、制作に取り組み始めました。光や炎などを用い人・物を演出するという方法は、聖人から光が発せられるといった後光を描いた宗教画をはじめ、多くの表現に用いられてきました。芸術作品としてだけではなく建物等の意匠も数多く存在し、防火のために寺院の欄間に波の模様を施すなど歴史上の様々な造形物に取り入れられてきた、古くから馴染み深いものです。詩的表現の上でも人物や場面をより印象づけ修飾する役割を持つものでもあります。実体のない現象でありながらも、イメージとしてある程度共通の認識や感覚を持つという点が興味深く、火や光、水等の素材は身近で、観察は小規模なものであれば手軽に行えるという点から題材として一考に値するのではないかと思案しました。既存の表現の考察をふまえ、参考にしながら立体造形の表現方法を探っていきたいと考え制作を行いました。



藤野真絢



「記録Ⅰ」



「記録Ⅱ」

タイトル：「記録Ⅰ」、「記録Ⅱ」

作 者：藤野真純

サ イ ズ：2200×850(mm)

素 材：木製パネル、紙、口紅、アイシャドウ

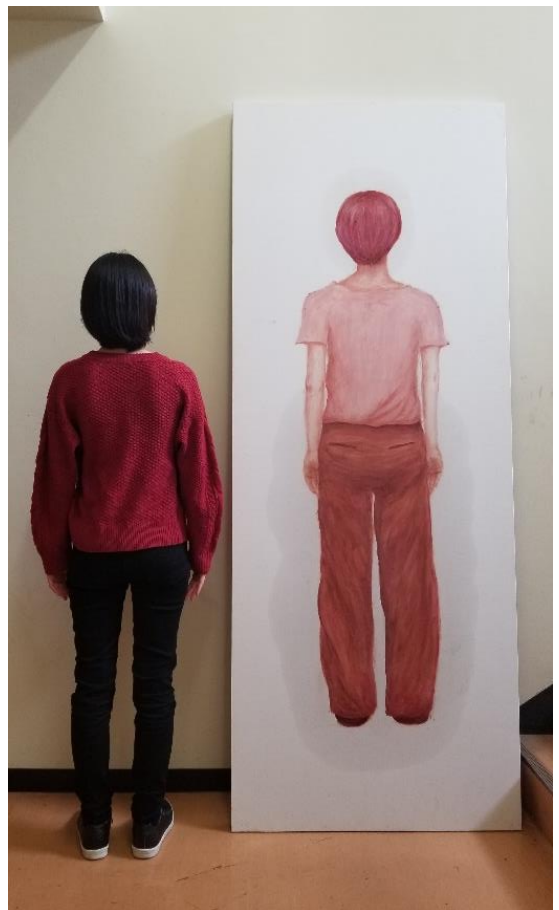
作品解説：

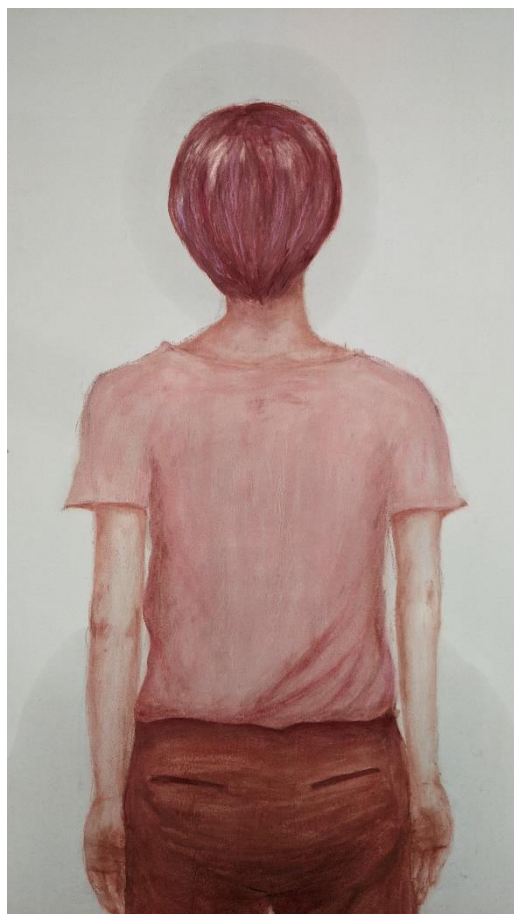
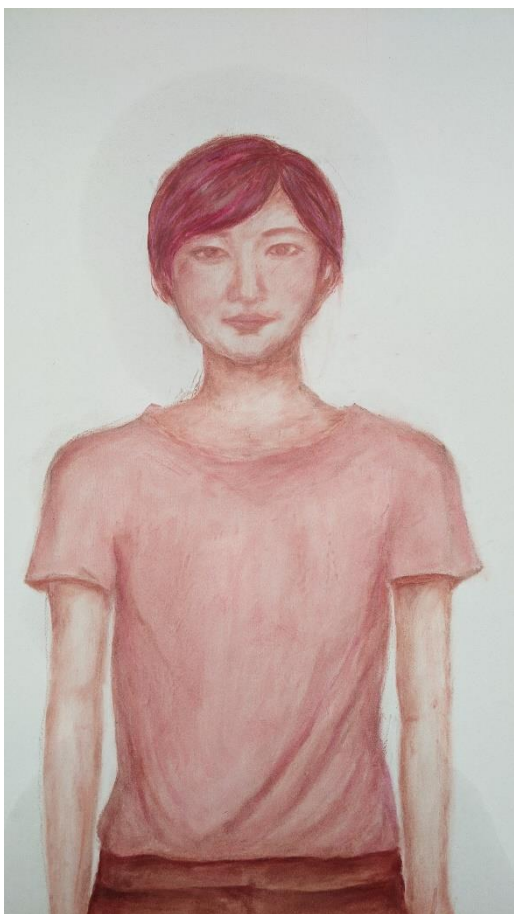
本制作では、口紅を着色剤として使用し、それによって生じる一般的な表現材料との違いについて考察しました。自分自身を描くことで、他の着色剤では単なる人物画以上の意味を持たないようにしています。この制作を行うにあたり、私は自分を象徴するような表現材料、つまり着色剤を選択したいと考えました。それが化粧品だったのです。私は勿論メイクアップアーティストではありませんし、化粧の技術が高いわけでもありません。しかし、毎朝自分と向き合っ化粧を施すという時間が、一日をスタートさせるために必要なスイッチのようなものなのです。実際、化粧をしたからといって別人のように顔が変わってしまうことはありませんし、化粧をしてもしなくても生きていくことはできます。ですが、化粧を施すことによって、何でもない一日がちょっと素敵なお日になったり、自分に自信が持てたことで一歩を踏み出せたりするかもしれません。それは、自分の内面的な何かが確実に変化するからだと思います。

研究目的：

本研究に先立って、着色剤や支持体に着目した絵画制作を行いました。そして、それを踏まえて特に着色剤に着目した制作を行っています。美術の授業で一般的に用いられる表現材料、すなわちクレヨンや絵の具、画用紙などはメーカーが出来るだけ多くの人に使いやすいように設計したものであり、それらを使用することには何の問題もありません。しかし一方で、それによって児童生徒が「絵を描く＝鉛筆や絵の具を使う」というイメージで固定されてしまう恐れがあります。また、支持体(画用紙)においても「ツルツルした面には描いてはいけない」といった言葉をそのまま受け取った子ども達は、それが何故良くないのかも分からずその「ルール」に従い続けてしまいます。表現材料に関する知識がないことで、自分が頭の中で思い描くものと持ち合わせている知識や技術のバランスが取れず、「美術は自分の思い通りに表現できないつまらない授業だ」と考えるようになるのです。

これらの問題は美術の定義や価値を限定してしまうことに繋がり、児童生徒の深い学びの実現を難しくしています。こうした課題を解決するために、上に挙げたような表現材料とは異なるものを絵画に持ち込み、表現行為に落とし込むことが有効だと考えました。今回私は口紅を着色剤として使用し、絵画制作を行いました。そして、制作過程で得られたことを基に、口紅を表現材料とみなした時の使用方法や作品が放つメッセージ性の違いなどについて考察しました。これにより、児童生徒の表現材料に関する理解を促し、ひいては表現材料と自己の主張を結び付けることが出来るようになることを目的としています。また、学習を深めていく中で児童生徒が日常から表現材料を発見したり、日常とアートの繋がりを意識したりすることが出来るようになることを目指しています。





山本愛里沙



タイトル：「結ぶ」

作 者：山本愛里沙

サ イ ズ：1800mm×2100mm

素 材：油彩 木製パネル 綿

作品解説：

『私が小学生だった頃、ある日給食の時間にふと料理をみて考えたことがありました。

「この食べ物にも確かに生きた時間があったんだ。」

それらは料理になる前に、魚であれば水中を泳ぎ、動物は餌を食べて、植物は日光を浴びて成長したのだろうと思います。

皆さんも一度は子供の頃に考えたことがあるのではないかと思います。

その事実は当たり前ではありますが、それまで何気なく食べていたものが「命」という重みを背負いながら私の中で急にその存在感を大きくし始め、食事としてそれらを食べることに当時不思議な感覚になったことを今でも覚えています。

今の時代では、食と命という繋がりにおいて個人それぞれの考えから様々な立場をとることができます。それらの考え方を基に実際に行動に移す人もいれば、考え方・捉え方や信念として持ち続けながら生活する人もいます。

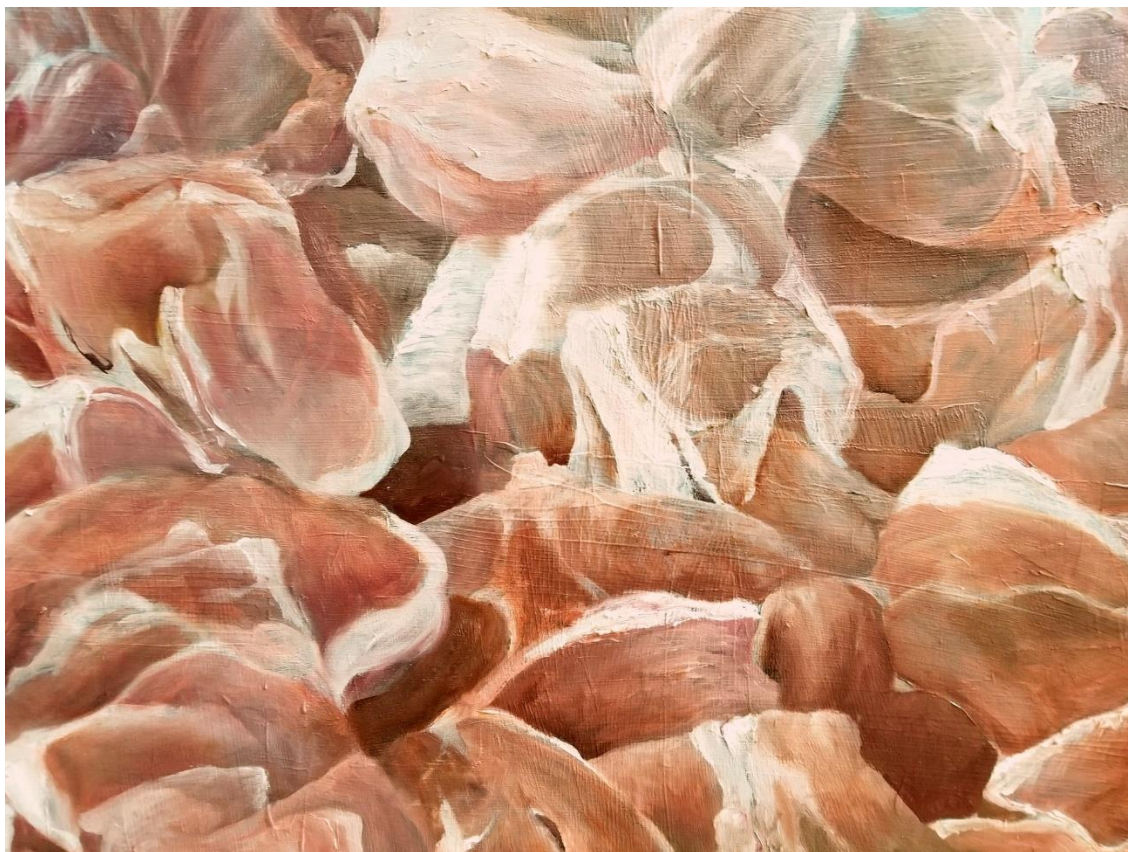
食と命。この絵を観て頂いて改めて何か考えのきっかけになればと思います。』

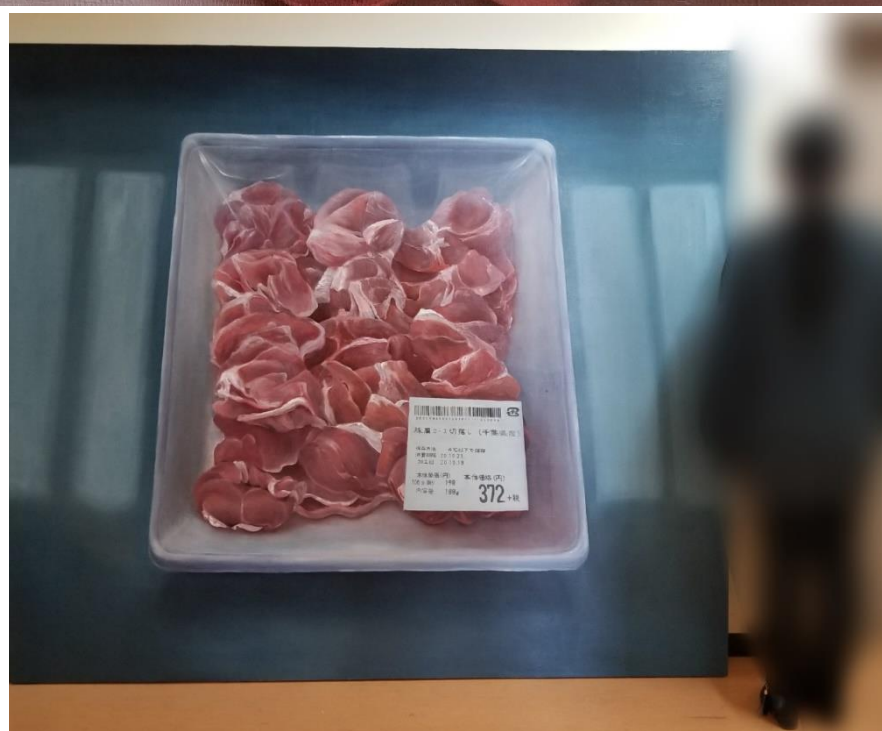
日頃生活を繰り返す中で、毎日同じ場面を見ているのにある日ふと同じ場面から新しい考えや気づきが生まれることがあります。そのような場面をテーマと共に作品にし、また長い時間をかけて制作する過程でテーマと向き合いながら思考することで自分自身の思考を改めて深めることができるのではないかという考えから制作した作品です。

研究目的：

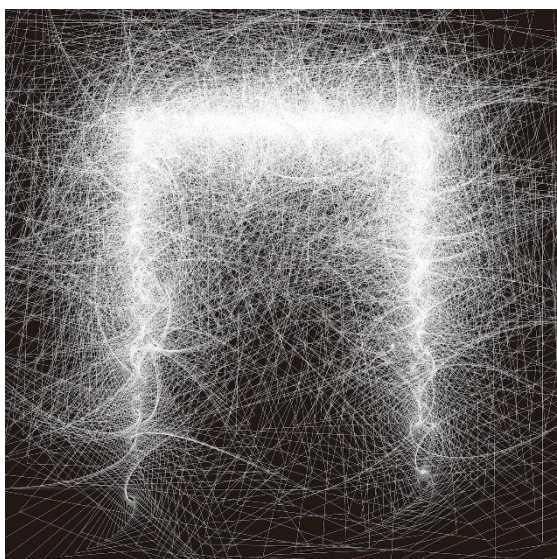
昨今の複雑化する社会では、アイデンティティを確立させることが非常に困難であり、また一般的な美術領域において作品制作という行為は単に見栄えの良い二次元的な視覚媒体を完成させることを目的とした作業となってしまうように感じることがあります。そこで、美術作品を制作するという行為が単に見栄えが良い作品を制作するという行為にとどめず、その制作過程でテーマに対する思考を深め、自身や社会を改めて見つめなおす行為であるという考え方を基に私自身が思考を重ねながら制作を行うことで、教育領域にとどめずに美術表現の可能性を再考することを試みました。

また教育との関連として、成長段階である児童生徒たちがアイデンティティを確立する場面において、写実的表現を用いた授業の際に描写技術の習得を前提としながらもそれを到達目標とせず、生徒が自身の思考・感情を画面に投影する作業を繰り返しながら自分自身と向き合う機会を増やすことで、授業を通して徐々に自分自身を知り理解する手助けとなる授業環境へと繋げたいと考えました。そこで、美術の授業において写実表現を用いて生徒がより自分自身と向き合い理解するためにどんな授業が考えられるか、また生徒に向け授業を行う中で作品制作を行う際にどのような授業展開や授業説明を行い、サポートするか検討することでさらなる授業の可能性を探ることを目的としました。

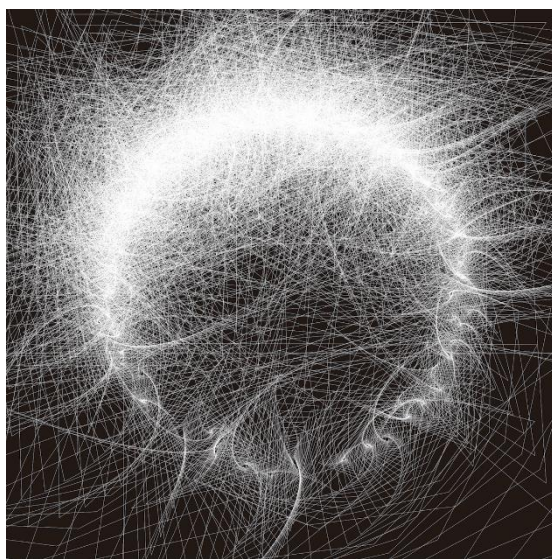




許芳薇



作品1 「Lan」



作品2 「Zhou」

タイトル：「Lan」、「Zhou」、「canyon」、「Blooming」、「Tow」、「Pull」

作 者：許芳薇

サ イ ズ：作品1、2：1800×1800（mm）

作品3、4、5、6：594×841（mm）

素 材：防疫コロス、紙、木製パネル

作品解説：

このシリーズの作品は、大量の線の閉じられた形に、一定の比率で複製・縮小・回転を繰り返した図形の一群を基本図形とし、無数に重ねて制作した。全体的に見ると、線は非常に複雑だが、構造は単純で、多くの三角形、四辺形、多角形の基本図形が重なっているのみである。その重なりをコントロールすることで、線の密集部分に明度の同化効果が発生し、遠くから見るとまるで画面が光っているかのように見える視覚効果が得られる。また同時に、図が粗い部分には対比効果が起こり、線が明瞭化する。実際には、大量の図形の中心を一定の軌道上に置き、画面全体の密度をコントロールして、このような効果を生じさせている。乱雑な様子にならないのは、構成学的な秩序を実現し、画面全体の均衡を図っているからである。画面にはたくさんの弧線があるように見えるが、実際は、直線のみを使用して制作している。画面をよく見ると、図形が重なって立体的に見える部分もある。白黒の無彩色で作品を完成させたのは、今回の研究では形態のみを研究対象としているため、色彩などの造形要素をあえて省いたからである。

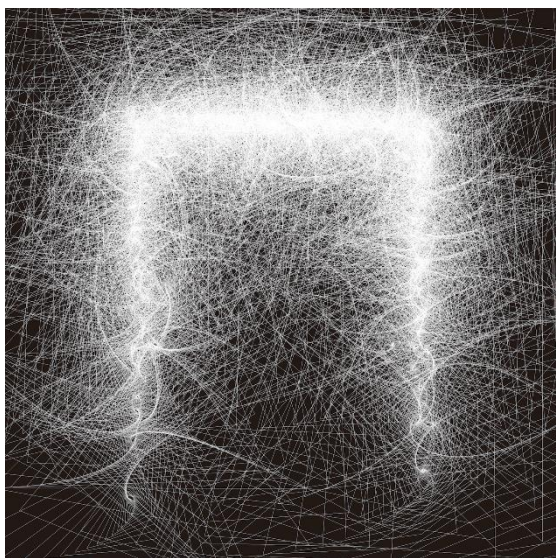
研究目的：

私にとって最も興味深いのは、造形要素の形態に属している「線」である。スケッチや、下描きなどはほとんど線描で行われる。自分が学部時代に注目していた中国や日本における伝統的な刺繍や編物の造形美に興味を持っていて、その中で特に線を使って表現する所に惹かれている。そして、線描によって、形態を暗示させることもできる。具体的な形だけではなく、抽象的な形態も表現できる。また画面の中に、線の太さや、間隔などによって、前後関係や立体感などを生むこともできると思う。

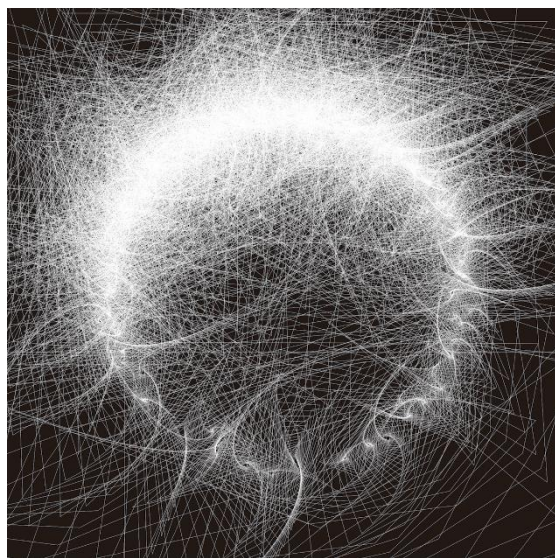
線という造形要素を考える際に、やはり構成学的な視点が欠かせないとの判断から、教育方法の一つとしての構成についても押さえながら制作方法に対する考え方を明確にしたい。研究生時代、大学院時代

と、構成教育についてこれまで学んできたが、日本に導入される際、デザインに関する専門の学校に展開していたが、その発展に伴って、構成という造形教育は普通教育に応用されていた。これまで構成教育は、すべての造形分野に共通する形態や色彩などの基礎的な造形能力を育成することによって、美的な情緒や感情を合わせて、全人的な発展を目標としていることが理解できた。したがって、構成学的な視点を踏襲しつつ制作していくことは、専門教育におけるデザインの基礎教育ばかりではなく、図画工作や美術といった公教育にも有用であると考えている。

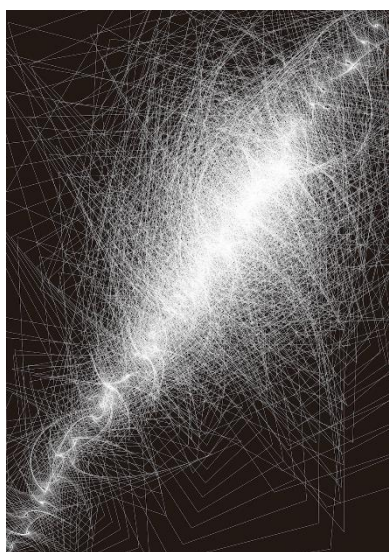
本制作研究では、研究によって得られた知見を活かして作品制作し、その結果によって獲得できた「線」に着目した様々な表現の可能性を、造形教育に活かしていく方法にも言及できればと考えている。



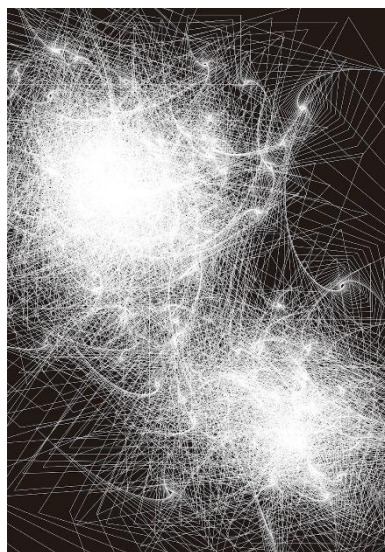
作品1 「Lan」



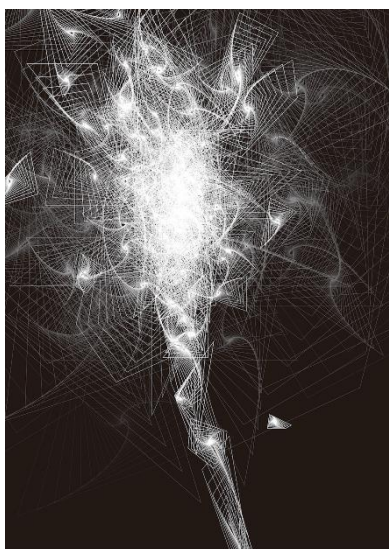
作品2 「Zhou」



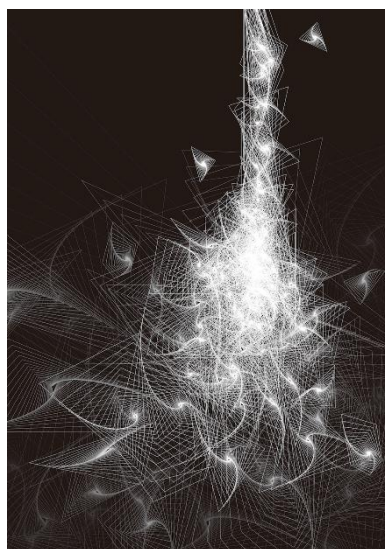
作品3 「canyon」



作品4 「Blooming」



作品5 「Tow」



作品6 「Pull」

展示の写真



